

新型インフルエンザのこれまでの検査体制の経過とウイルス検出状況

2009年春、メキシコやアメリカでの発生報告から始まり日本国内でも秋から冬にかけて大流行した新型インフルエンザは、ようやく一旦終息方向へと向かいました。

この間、当研究所では新型インフルエンザのRT-PCR法による遺伝子検査を実施してきました。その数は、2009年5月から2010年4月末までの一年間で1,000検体にのぼります。また8月以降は遺伝子検査に加え、ウイルス分離も実施しています。検査体制は、流行状況に応じ、主に以下の4体制で行ってきました。

①全ての患者の検査を実施【5月～7月23日】

発生当初は、感染が疑われる全ての患者の検査を24時間体制で実施しました。5月頃は季節性ウイルス（A香港型、B型）が検出されていましたが、6月13日に県内で初めての新型ウイルスが検出されて以降、新型ウイルスの占める割合が徐々に増加していきました。

②クラスターサーベイランス ～集団感染発生事例の検査～【5月22日～8月24日】

患者数の増加に伴い全数検査は中止となり、集団感染の発生時における検査へと切り替えになりました。夏季休暇シーズンと重なったこともあり、県外から合宿等で県内に訪れた学校等からの集団発生事例の報告が急増し、その事例の多くから新型ウイルスが検出されました。

③入院（重症例）サーベイランス【7月24日～現在】

④ウイルスサーベイランス ～一部の医療機関から採取された検体の性状把握～【通年】

夏以降、現在に至るまで、重篤な症状を示す入院患者ならびに県内の一部医療機関から採取された検体について検査を行っています。これは、新型あるいは季節性（Aソ連型、A香港型、B型）別の流行割合や、分離ウイルスの病原性の変化を把握するために行うものです。

■インフルエンザウイルスの検出状況

1,000検体の検査の結果、854検体からインフルエンザウイルスが検出され、このうち845検体（98.9%）が新型でした。一方、季節性はA香港型7検体（0.8%）、B型2検体（0.2%）検出されたのみです。特に注意報レベル（定点あたり患者数10.0人）に達し本格的な流行が始まった10月以降は、新型とB型の2タイプしか検出されていない状況です。

また、新型陽性者を年代別にみると、10歳代が364件（41%）と最も多く、次いで5～9歳の236件（28%）、0～4歳の109件（13%）と、未成年者の割合が8割を超える結果でした。一方、60歳以上は24件（3%）と非常に少ない状況です。

なお、分離された一部ウイルスについて、タミフル耐性変異の有無についても調査していますが、4月末現在県内でタミフル耐性変異を持ったウイルスは確認されていません。

今後も再流行が懸念されることから、引き続きインフルエンザウイルスの型別発生状況やタミフル耐性変異の出現状況の把握に努めてまいります。

（笠原ひとみ kanken-kansen@pref.nagano.lg.jp）

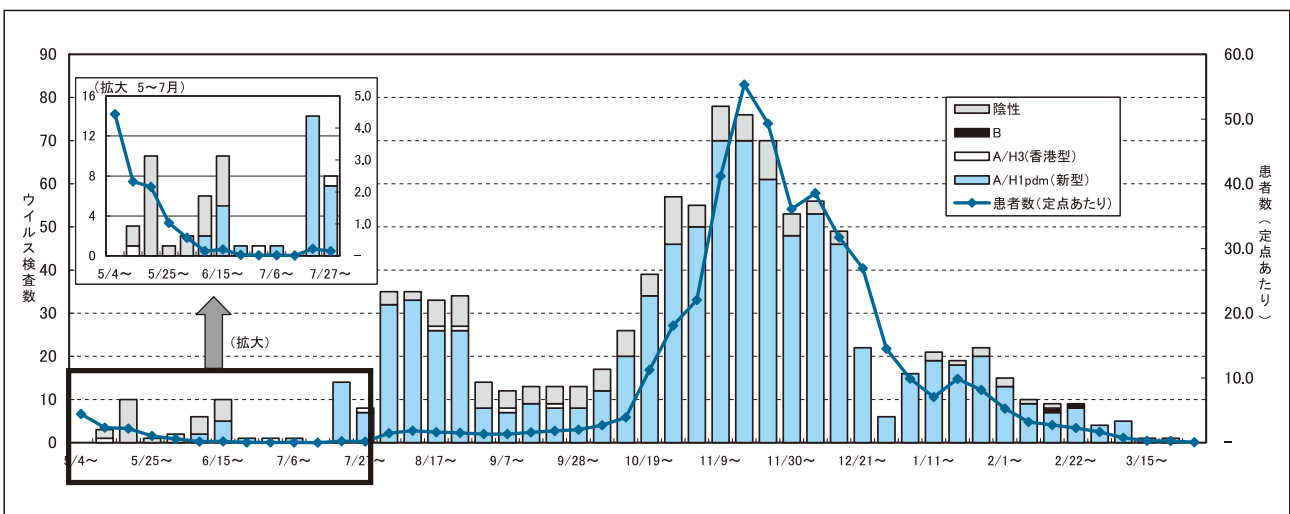


図 インフルエンザ患者報告数（長野県）とウイルス検査数（当所）推移